美しい暦
わが日わが夢

石坂洋次郎文庫
3

新潮社版

美しい暦・わが日わが夢
石坂洋次郎文庫 3

価 490 円
Printed in Japan
© Y. ISHIZAKA

昭和41年5月20日印刷
昭和41年5月25日発行

著　者　石坂洋次郎
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社 新潮社
東京都新宿区矢来町71電話
(260) 1111 振替東京 808

印刷所　二光印刷株式会社
製本所　新宿 加藤製本所
〈乱丁、落丁本はお取替えいたします〉

目次

「わが日わが夢」　五
風俗　三
壁画　一
お山　四
やなぎ座　五九
聖なる人々　八二
山の湯　六八
＊
闘犬図　一一四
桜だより　一三七

早春狂詩曲　一五八
ある人々　一六九
二重生活者　一八三
熊の皮に坐りて　二三八
女の道　二四三
*
美しい暦　二五八
著者だより　二八三
解説・亀井勝一郎　二八七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

美しい暦・わが日わが夢

「わが日わが夢」

郷土と少年の日々を描いた短編「風俗」「壁画」「お山」「やなぎ座」「聖なる人々」「山の湯」の六編を併せて『わが日わが夢』と題した。

風俗

ネブタ――佞武多と書く。

津軽の七夕祭の名物だ。三国志や古今武将伝から採った極彩色の武者絵を描いた扇形の灯籠に、花模様の欄間をはめ、台をつけ、これを若い衆の肩に担ぎ上げて、哀調殺伐な笛・太鼓の音に合せて、六夜、町内を運行してまわるのである。七日目、すなわち七夕祭の当日には紙が破け、骨が折れて散々な体になっている扇灯籠を、町端れの清流岩木川の川原にもち出して所謂ネブタ流しをやる。昔は文字通り灯籠を骨組ごと流したものだったが、いまは簡略されて、上張りの紙を洗い流すに過ぎぬ。若い衆達は、この日、七度水を浴びて七度飯を食い、川原の帰りは、赤襦袢に花笠の女姿で、陽気なジャガラギ（真鍮のシンバル也）の拍子につれて、（猫じゃ猫じゃ）に似た、むやみに跳ね上る踊りをおどりながら、飄々と目抜きの大通りをとんで行く。夏が去ったのだ！

俗説では、かの田村麿将軍が無知な蝦夷を威嚇するために、このネブタを案出したといわれて居るが、それはさておき、袷も欲しい北国の初秋の夜、一晩に二百丁から三百丁の蠟燭をペロリと平らげる大灯籠が三十・四十と勢揃いして、馬糞臭い埃をムンムンと巻き上げて練り歩く光景は、確かに旅人の目を奪うに足る怪しい原始的な観物であった。

ネブタの運行中は、毎晩黒山のような見物人が大通りに蝟集する。露店も出る。アセチレン瓦斯の臭い、パチパチはぜる玉蜀黍の香気、季節はずれなアイス屋の風鈴、ゴム風船の泣声、……みんな初秋の夜のなつかしい景物だ。人いきれがモウと家々の軒先に低く沈澱し、足を踏まれた野良犬がギャンギャン悲鳴をあげて狂いまわると、二重三重の人垣が将棋倒しに崩れかかるのも面白い。この混雑のさ中に、どいつの仕業か、名状し難い猛烈な悪臭がそこら中にぬくぬくと臭い出すこともある。

「来た！　来た」

「見えるぞ！」

群集の中に波のようなどよめきがひろがる。遠く、潮騒に似た音響が聞え出し、地ひびきがし、間もなく消防の高

張提灯を先頭に、ネブタの行列が、昔々の化物のような勢いで迫ってくる。最初の灯籠の絵は鴻門の栩噲だ。怒髪天を衝いて、一吼よく沛公の心胆を寒からしむるの図だ。

「やあ——やど！」

「やろ——やど！」

癪かむりの遅しい若者達がかれたしわがれ声で気勢を上げる。ネブタの左右に、電線をはね上げる竹竿や防火用のささらを抱え、袖をまくし上げて控えているのは、町内選りぬきの腕っ節の利く一団だ。ささらをはずせば青い竹槍の穂先が現われることを知っている見物人は、まずこの俄仕込みの槍使い達に昔ながらの好意を感ずる。

次の灯籠は入鹿殿中に斬らるるの図。血しぶきが扇面をべっとり彩り、入鹿の首は無念の歯噛みをして宙天高く舞い上っている。どんじりの大物は、素盞嗚尊大蛇退治の図で、八岐大蛇の吐く紅焔が尊のお顔を焼くかと恐ろしい。この三つが一部内のだし物で、後に囃子方がつづく。大人の身の丈ほどもある大太鼓を片かしがりに吊しかけ、細い竹鞭で、力のありったけ引っぱたく者、石ころを入れた石油罐をぶち鳴らす者、首をまげ身体を踊らせてピロピロ横笛を吹く者、頬べたをボコンとふくらませて法螺貝を吹く者、それに例のジャガラギ……。全く耳を聾せんばかりだ。しかも各部内の囃子方はそれぞれのネブタに所属して、てんでに打ちまくり吹きまくるのだから、さまざまな音が、相呼び相応えて、見物人達のジーンと痺れた耳には、どこかに恐ろしく大きな釜があって、その中で熱湯がゴボゴボとたぎっているかのような奇妙な幻覚を起させるほどだ。舌や耳が砂埃でザラザラする。

「やれやれド！」

「やれやれド！」

停止中のネブタは蠟燭を万遍なく灯し了えて再び立ち上る。囃子方がきおいこんで一斉に行進曲を奏し始めると、それが、どこまで続くのか見透しもきかない行列の後方に次々と伝播していって、街全体が、あのゴボゴボと煮えたぎる原始的な音響の中に埋没されてしまう。

迎えるのは陽気だが見送るのは寂しい。ネブタもそれだ。表の勇壮活発な武者絵に反し、裏には青い死相を彩った生首を抱えて柳の下に愁を含んで立つ美人や、血が滴る懐剣を口にくわえて背を決する白面の貴公子などの陰惨悽艶な姿が描かれ、その両側には、人口に膾炙した慷慨悲歌の一節が墨痕あざやかに認められてある。

——猛虎一声山月高

——風蕭々兮易水寒

しんがりの高張提灯がはるかの街角を曲ってしまうと、瞬間は、匂いも音も光も人間も、そこにあるものは根こそぎにさらわれて、依然として往来を埋めつくして居る見物の群集は、魂のヌケ殻に過ぎないかのような空虚頽廃の気分が生ずる。こんな時にふと、晴れ渡った大空を見上げると、銀河が白々と悠大な弧線を描き、牽牛・織女はもちろん、それをとり巻く数々の星の群れが、心なしか今宵は光芒を新たにしているように感ぜられる。

巻井友一は、小学六年生で横笛の名人だ。笛は太鼓やジャガラギとちがって、性分のもので、年齢や膂力ではどうしようも無いものだ。友一は尺五寸の大人用の太竹を愛玩していたが、一度唄口を湿してピッと呼吸をふきこむと、円い音色、めりはり、あや、いずれも見事に整って、老人達でさえ、

「あらア、友ちゃん、笛コ吹いでらあ」

と嘆賞を惜しまないほどだった。ところで、ネブタの運行をひきたたせるものは一にも二にも笛の音色にあり、季節が近づくと、あそこの川端、ここの神社で、毎晩遅くまで若者達の笛の稽古が始まる。行進曲は一本調子で覚え易いが、停止中に奏するバリエーションと、引き上げの馬鹿囃子とは、変幻自在を極めて、ちょっとにはこなせない難曲だ。それを十八番にする友一は、今年も部内の年番から両親に願われて囃子方に出たが、この役目、友一には自慢でもあり大儀でもあった。

第一睡くって泣きたくなる。全市のネブタが隊伍を組んで目抜きの町筋を一通り運行すると、後は各部内に別れて、思い思いに練り歩くのだが、引き上げは早い時で十二時、少し遅ければ午前の一時を過ぎることも珍しくない。蠟燭が消えかかった薄暗いネブタを引きずって、シイーンとひそまりかえったお濠端の暗い道を帰る頃には、アシダカ（藁草履）を穿いた埃まみれの足が棒のように固くなり、反対に、睡い頭は骨無しのようにグラグラ前後に揺れ動く。若者達のわいせつな会話が、時々青竹のようにピシリ！　と頭を殴りつけると、その時だけはギーンと眼が冴えるけど、後から襲ってくる猛烈な睡気が、思わずフラフラと列の外へ身体をはみ出させてしまう。友一は小便かつまっていた。けれどもその用を足していると、くらがりの中に一人ぽっち置き去りにされてしまうので、身体を上に吊りあげるようにして小便の重みを支えて歩いた。……泣き出したいのはこのためなんだ。オレ、喧嘩だって強いし、むやみに泣き出したいもんか、だがこんなに下っ腹が破けそうだったら大人だって泣くだろう……。友一はこわいの

か意地っぱりなのか自分でもわからず、夢中で疲れた足をひきずった。

道路の片側は、空地を囲ったひば垣が長く続き、所々に五、六本の杉の塊りがお化けのようにのっそり黒くつっていた。濠の向う岸の小高い堤には、不気味な枝振りの老松が僅かの隙間を置いて一列に立ち並び、その影が、濠を越えた道路の半ばまで、濃く、重々しくのしかかっていた。枝が縦横に絡み合った梢のあたりの漆黒の闇にじっと目を注いでいると、その中から、新しい濡れ光る闇が、煙のように、熱湯のように絶えずムクムクと吹き出しているのが、異様に爽やかな感覚をひき起した。濠の中では雨蛙がグワッグワッと戸惑いしたような半端な鳴声をそこここにあげていた。

若者は欠伸をしたり、太鼓に合せて卑猥な唄を高唱したり、むやみに音の高い屁をひったりした。ネブタの小屋がある旧招魂堂の広場に辿りつくと、友一は、安心して一の大鳥居の親柱の根もとに元気のいい小便を垂れた。鳥居の柱という柱の下には女の子のおはじきの穴があり、右から二番目の穴には、昼間、米屋の新吉が蛙を潰して投げ込んだ。しかし新吉は雑魚獲りにかけては確かに名人だ。小屋は広場の奥の古井戸と屋根続きに建って居た。崖っぷちの疎らな松の並木の間から、下町の灯りが点々と見晴らされ、その背後の鼠色の夜空に岩木山が朧な星明りを浴びて端然と小綺麗に聳えていた。友一のお袋に似ている山だ。

虫が涌くように鳴いていた。右手の玉蜀黍畑の向うに垣根の闇に深く埋められてげんの家があった。二階の雨戸が半分立てられてそこから薄いあかりがさしていた。

「げんよう、ネブタ見れよう……」

若者の一人がわざと鼻潰れの声を出して叫んだ。

「この野郎、邪魔すんな。折角男が来てたのしんでいるのに……」

蠟燭をすっかり吹き消したくらがりの中で、若者達は、げんについて、聞くに耐えない淫らなじょうだんを言い交わした。友一の頭は燐のようにポッポッと燃え上った。わずかに残っている生気の最後の一滴をも焼きからす、青い、惨酷な炎だ。友一は顎が妙に酸っぱく硬ばり、げんの室の灯に、うずくような切ない悲哀をそそられた。げんの白いやさしい顔が、樹の枝にも、畑の中にも、地面の上にも、火の玉のようにふくらんだり閉じたりして見えた。

広場の右端に、子供等が斥候穴と呼んでいる、かなりな深さと円周をもつ空池があり、その向う堤に母家と棟つづきの小さい禁錮所がつき出ていた。ここには友一等が覚え

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

が無い程の昔から、学問馬鹿とよばれる中年すぎの狂人が監禁されていた。先刻からの人声で眼を覚まされたのか、鉄格子の嵌った小窓がガタンとひきあけられ、中からペッと唾を吐く音がきこえた。じっとこっちをすかし眺めてる気配だ。と思うと、たちまち、いつもの鋭い、きれぎれな言葉で、まるで訳の分らない政談演説のようなものが始まった。唾を吐き、床をふみ、羽目板を蹴るのが、見慣れて居ってもこんな夜更けだとぞっとするほど恐ろしい。うす暗い中空にひそんでいる山彦が、鉄格子の窓から吐き出されるちぎれた言葉の断片を、きっかり二重に複製してボーンと空高くほうり上げる。余韻が縦横に交錯して、あのわめいている狂人だけがすぐれた真実の知恵を備えていることは疑うべくもない、という奇妙にたより無い考え事がみんなの胸を空っぽにした。友一は昼間でさえも、世の中で一番美しくやさしい女はげんであり、高尚な哲学という学問を知っているのはあの狂人のほかに無いんだ、と熱走って信じていた。

若者達は言葉少なに我が家にひき上げた。中の三、四人は遊郭をひやかしにぬけて行った。友一は寝床のやわらかい感触を思って身体をしびらせながら、今日の駄賃の十銭玉を掌に握りしめ、若者の一人に送られて、近道の崖の小径を小走りにパタパタ下りて行った……

――げんは男をとって暮しをたてているごけだった。左手が肱の関節から切り落されて空っぽになっている不具者だが、顔が綺麗なので、忍び客が沢山通って来た。いつどこで生れたのか近所では誰も知らなかった。三年ばかり前、丁度その頃空家になっていた旧招魂堂広場の一番端れの傾いた二階家に、今もいてげんの身回りの世話をして居る骨組の岩乗な老婆と一緒に、僅かの荷物を抱えて、どこか汽車に乗る土地からひっこして来た。げんと老婆は肉親でも主従でもない、年齢こそひどくかけちがっているが仲の好い友達だった。げんのやる仕事が分っても近所の人達はげんを軽蔑しなかった。というのは、場末のこの一画には、娘を酌婦や芸妓に売って自分達はバクチや酒盛りをして日を暮す、自堕落な、そのくせ妙にお人好しな貧民の群れが多く住んでいたからだ。げんや老婆が人好きのする素直な気立をもっていたことも近所交際に成功した一因に相違ないが、大の男のくせにげんの走り遣いをして駄賃を貰うような意気地無しまで現われて、ちょっとの間にげん達は招魂堂長屋の人気者になってしまった。管内受持のお巡査さんの靴音が聞えると、広場のとっつきに間口一間の埃だらけの鼻緒店を開いている「樺太熊」というあだ名の親爺が、

裏口から裸足で飛び出してまっさきにげんの家に告げた。通いの客で、悪酔いしたり、払いに難癖をつけたりする奴があると、これも長屋の義人連がかけつけて、胴を切り刻むように明快な裁断をつけた。いつか古井戸に逆吊しにされた旅渡りの売薬商があった。げんも親切をいただきっ放しにはしなかった。長屋のよりごとには欠かさず酒を届けたし、病人は見舞う、時には男達のもめ事に飛びこむこともあった。そんな時には「まあええやないか。あてにまかしとくんなはれ……」と、どこか産れた国の耳馴れない言葉を遣った。すると長屋中にその言葉がはやり出し、子供達まで「ええやないか……まかしとくんなはれ」と、おかしな節をつけて口々に言いはやした。

——友一は、母のほかには女というものを好かなかった。が、旧招魂堂の広場は子供等の一年中の遊び場所になっていたので、長い間に、げんについて右に叙べたような知識を知らず知らずに蓄えていた。時々、着飾ったげんが老婆と連れ立って町へ買物に出かけるのを見て、どこかの奥様のように立派だと思ったりした。

所がら、子供達は下品な遊び事にふける傾きがあった。「のぞき」もその一つだ。げんの室に客が来ているのを見つけると、垣根の梅の木の横枝から屋根に匍い上り、障子の隙間から内部を覗き見した。女の子もそれをやった。落ちて足を挫いた子もあった。友一は、学校の級長をやっていたし、母が厳しかったので、誘われてもその遊びに加わらなかった。だが、仲間のふざけた報告をきくと、胸がドキンドキンして顔が火のように燃えた。

げんが病気になったという噂がたった。なおらない病気だといった。なるほどその頃からげんの外出姿をバッタリ見かけなくなったが、子供等が広場で遊んでいると、二階の窓があいてげんの白い顔が、一時間も二時間も、日が暮れるまでも、じっとこちらを眺めていることがあった。死ぬ病気だなんてウソだ、と友一は思った。ある晩、友一は、父と母がげんの話をしているのをきいた。昼間、父が診察に招ばれて行ったらしい。

「……まず、駄目だ。ずいぶん無理をした身体で、二つも三つも病気が重なっているんだからな。今さら高い注射をしたってなおりっこないし、あれで稼げないことになれば薬礼だってもらえる見込みはなし……気の毒は気の毒だが……」

「一つはげんも我儘なんですよ。お妾の口は降るほどあるんだそうですが、人の所有物になるのはいやだって強情をはり通すんですって……。なお身体に無理をする暮しに

なるのにね。今度みたいに病みついてしまえば、それこそ誰の所有物でもないのですから、誰も構いつけてくれない。……いい気前で、いいきりょうで、全く可哀そうだわ」

友一は、父が義侠に乏しいと思った。しかし、父は流行らない医者で、今年からは一人ぎりの看護婦にも暇をやらなければならないほど家の暮し向きが逼迫していることを知っていたので、そのために父を憎んだりさげすんだりしなかった。母が涙を滾して励ましてくれるように、自分だけはあっぱれ名医になり、お金も儲け、天下国家のために、大いに働きたいと考えた。

それから二、三日後、友一は、自分が管理させられている学級文庫の調べがあって、一人遅れて帰宅し、夕暮方、旧招魂堂の広場に出かけて行くと、いつもいる仲間の姿が一人もその辺に見当らず、斥候穴の禁錮所の演説馬鹿が、夕陽の赤い眩しい光に向って、声を嗄して、むずかしい哲学を捲んでいた。激してくると、黒い痩せた手が、鉄格子の外に魚のように踊った。髭ぼうぼうな、尖った黒い顔もチラと見えた。友一は、芝生の上で逆立ちを二、三回やって、つまらなく家へ帰りかけると、ふと仲間のガヤガヤ言う声が風にのって耳もとをかすめた。ふり向いて広場の端から順に目をうつしていくと、げんの家の二階があいていて、窓に凭れたげんの白い顔が見え、何だか手を上げて友一を招いているように思われた。仲間もその窓下に集っているらしく、畑の青い物の上に、黒い頭が見えたり隠れたりしていた。友一は鉄砲玉のようにそちらへ駆けていった。果して多勢の仲間が集っていて、二階を見上げて口々に「げんちゃん、早くしとくれよう」と何かせがんでいた。お菓子をまいてくれるというのだった。

「あなた巻井さんの坊ちゃんでしょう？」

ハアハア忙わしい呼吸遣いをして居る友一の眼をしっかりつかまえて、げんが優しく笑いかけながら言った。友一は赤くなって、黙って頷いた。

「じゃあ、まくわよ。喧嘩しないでね。――ホラ！」

げんの片腕が窓敷居から消えると、一つかみの豆おこしがバラバラと降って来た。ワッと言う喚声と共に子供等は蟹のように地面を匍いまわった。友一も顔に当ったのと足許に落ちたのと二つ拾った。

「ホラ！　ホラ！　ホラ！……」

げんはコロコロ笑いながら、右に左に、近く遠く、子供等を間誤つかせるように矢継早に豆おこしを投げ出した。車屋の一郎は物凄い体あたりで地面にドシンと転げて、獲

物が散らばった所を一番広く占領した。新吉は学校帽子をふりまわして空中で獲物を引っさらう早業を演じた。こんな事では人に負けないはずの友一は、わざとのろくさく振舞って、仲間に押されたり反対の方へ走ったりした。というのは、げんの投げ方は出鱈目らしく見せかけて、実際は友一の都合のいい所にばかりまいてよこすのが感じられ、

「右！　今度は左！　右！」

そういうのも友一の顔をじっと見つめて内緒の合図をしているようなものだったから、友一は疚しく恥ずかしくて手足の自由が利かなくなってしまった。公平にバラ撒いたって一番よけい拾えるのに――。友一は菓子も欲しいので、げんの尻眉を恨めしく思った。最後に仲間を玉蜀黍畑の中に走らせて置いて十分引っ返す間がないうちに、袋ごと残った菓子をほうり投げた時は、友一も夢中で飛び上って両手でしっかりと受け止めた。

「もうおしまい。また今度ね。――誰が一番多く拾ったの」

子供等はお互いの手やふところを目でさぐり合った。

「友ちゃんだい！　袋ごと拾うんだもの」

一郎は盗人のような眼を友一の紙袋に注ぎながら、フンフン鼻を鳴らして怒鳴った。すると「禅太熊」のお上さんの連れ子で悪遊びばかりする、タケという五年生の女の子が、斜めな逃げ腰に構えて、首だけこちらへつき出しながら、

「知ってらい、知ってらい、げんちゃんは友ちゃんに惚れてんだもの。友ちゃん腹を撫ぜてもらうがええや、へっ」

ドッと笑った。

「なにィ、くそったれ！」

友一は紙袋をほうり出し、三跳び位で、タケの頭の上からタックルして地面に平ったく押し潰した。タケは身体がずんぐりして女のくせにいつも喧嘩が強かった。友一が身体で身体を抑えつけ、タケの口に草や土くれをつめこもうとすると、猛烈なイヤイヤをして、黒い爪で下から友一の顔を引っ掻いた。友一は焦れてペッペッと唾を吐きかけながら、タケの腕を枯柴のように二つに折っへしょった。仲間はまわりを囲んで、しゃがんだり立ったりしながらニヤニヤ眺めていた。

「タケ！　噛みつけ」

「目に指つっこめ！」

タケの方に多い面白半分の助言に混じって「友ちゃん、友ちゃん、およしったら……」と呼びかけるげんの甲高い叫び声も耳についた。友一はタケの爪を避けるために思いきって地面に顔をくっつけ、最後の大きな土くれをつめこ

んでタケの口を塞きにかかった。タケは鞴のような荒い呼吸を吐いて友一の耳に嚙みつこうとした。折り重なってもみ合う二人の裾が乱れて白い腿が絡んで居るのを見て、新吉がびっくりするような卑しいじょうだんを言った。みなドッと笑った。友一はギクリとして、だにのように絡みつくタケを足で押えて身体からつき離し、立ち上って着物の襟前をかき合せた。

「チクショウ、泣くもんか、友一のバカヤロ……」

タケは口から土をはき出しながら血走った眼で友一を睨みつけた。

「女子でなけあ殺して呉っとこだ……」

友一はつくろった余裕をみせて言い返した。

「友ちゃん、友ちゃん……」

げんが二階の羽目板をたたきながら呼んでいた。友一は聞えん顔でそこに置いた先刻の紙袋を探したが見つからなかった。誰かクスリ！　と笑った。

「帰ろ！」

「帰ろ！」

仲間は見よがしに手を組んだり肩を組んだりしながら、タケも中に入れて、一の鳥居の方に引き上げかけ、少し行くと、みな声を揃えて、

「医師・藪井竹庵の妻ちょうだい！　有難う！　同じく息子ちょうだい！　有難う！　同じく娘ちょうだい！　有難う！……」

と「家族合せ」の口真似を合唱し始めた。友一は涙ぐみながら、反対の眩しい夕陽がさす斥候穴の方へ、片足ずつでケンケン飛んで行った。げんはもう呼ばなかったけど、自分を見送っているげんのやさしい顔が、背中に軽いリュックサックのようにおぶさって居るのが感じられた。

禁錮所の狂人はまだおしゃべりをつづけていた。友一はひどく口惜しかったが、そのままそこの草原につんのめってオイオイ泣いて見たいような、甘ったれた、楽しい気持も底に動いていた。だが、友一はとうとう一ぺんも後ろをふり向かずに、崖の小径を一散に駆け下りた。

げんと友一はこっそり友達になった。げんの二階は、広場とお城址に面した二つの窓をもっている、明るい、風通しのいい室だった。床の間にはお濠の藻草を浮べた水盤を飾り、八字髭のように右左にはねかえった字で「金刀比羅大神宮」と書いた、錦切れで表装した小さな軸がかかっていた。半間のちがい棚の上下には雑誌や本が堆くキチンと積まれ、上り口の壁際には鏡台や茶箪笥が、さびついた、くすんだ光を放っていた。着物や三味線やパラソル、手提

袋なども押入れの襖の上に下がっていた。床の間の方に片よせて、やわらかい清潔な寝床が敷きのべられ、げんは派手な縞模様の浴衣に赤い伊達巻を結んだくつろいだ姿で、一日中その上に横たわったり、坐ったりしていた。腰を病んでいたのだった。傍へよるとプンと香水の匂いがした。

げんは疲れたのか両足を前に投げ出し、片手を器用に動かしてその上に軽い毛布をかぶせた。いつも友一の前では行儀を正しくしていたのだ。頬や首筋の白いふくやかな肉づきが、近眼で見ると、もうそれだけでほかの希みが消えうせてしまうほどの、満ち足りた、滾々とした美しさを溢れさせていた。

「あのう、ね」

友一はポツリと言った。

「家で言ってたよ。——げんちゃんは、誰かたった一人の親切な優しい心の人に世話してもらえば、身体も丈夫になってもっと幸福になれるんだって……」

「そんなこと……」

げんは低い声で笑った。

「世話しようって言う人は沢山あったの。だけど断わっちゃった。一人の人に仕えればその人だけに誠心を捧げなければならないでしょう。げんにはその大切なものが無いの。誠心って、生れた時からあるもんじゃないわ。人が気長に辛抱して少しずつ育て上げて行くものなの。げんもそれをやったわ。だけど、少しそれらしい形のものが出来ると、誰か来てそれを滅茶苦茶にぶちこわして行くの。何度もそんな目に会うちに、げんにはもう辛抱する力が無くなったの。げん、泣いたわ。でも、げんは誠心をつくることを諦めた代りに別な一つの決心をもったの。それはね、どんな男の人をも愛すまいということなの。その力も資格も無いのにあるようなふりをするのは、いけない、恐ろしいことですものね。げんは道端の石塊みたいに出来るだけ沢山の人に踏まれたいの。踏まれて来たの。そうしてる間にげんの苦しみも悲しみも霧のようにうすいものになり、舞い上る埃や雲や樹や草や、そんなものと同じに、何の感じも無い、ただ呆とした、だけど幸福って言えば言えるようなおかしい気持が湧いて来たの。朝、戸や障子の隙間から太陽の光がさしこむわね。そしてその光の縞の中には何千っていう細かい埃が浮いて踊ってるでしょう。げんは、自分がその埃だと思うの。身軽い、ひろびろとした、はかない気持！——人に踏まれた石塊が段々土の中に埋って、しまいには見えなくなるように、げんももう長生き出来ないと思うの。長過ぎも短か過ぎもしない。でも、げんは誰か

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb